教育心理学教室教官の研究状況報告

一年間の研究経過報告と今後の課題　植　村　勝　彦

1. 1970年以来継続してきた「いわゆる過疎地域の家族関係」に関する共同研究は，今年度に入って一応所期のデータ収集の完了をみ，分析の段階に至っているが，私は従来からの関心の視点に基づきつつ，次のような作業を進めている。

イ　過疎地域からの離村者に対する面接調査に関する分析（昭和46年度科学研究費）は，その一部を今年度の日本教育心理学会総会で「いわゆる過疎地域の問題(10)～(12)」として久世，松田両氏とともに発表した。また，これを基にし，発表時点でデータの得られていなかった地域をも加えたより詳細な分析の結果は，本年度の紀要には間に合わなかったが，過疎研究グループの共同研究として次年度の紀要に報告するべく準備中である。そこでは，離村理由類型との関連で離村者の「ふるさと」観を明らかにすることを試みているが，意識および行動の係留点としての「ふるさと」の問題を Community Psychology の方略の単位のひとつとして利用できないものか考えるに至ったが，まだ明確に構想を提出するところにまでは至っていない。

ロ　上記の離村者の調査とは対照的に，過疎地域居住民の「留村理由」に関して，「過疎地域住民の留村理由の分析の試み」と題して今年度の日本社会心理学会大会で発表した。これは，これまで分析を進めてきつつある「資料集」の「質」的データを補完し，また妥当性を検証するための手掛りとしようとするものである。一町村のみの結果であり，また必ずしもデータの解析に成功しているとは言い難い点もあるが，過疎以外の町村との比較や，サンプルの増大，留村要因としての指標の摘出などを通して，分析の精度を高めたいと目下考慮中である。

ハ　「資料集」を用いての分析に関しては，昨年度の紀要の報告に引き続き「私的共同活動」の諸側面に焦点を合わせて地域共同体意識の変容の様相を扱うことを予定していたが，まとめるには至らなかった。次年度への継続を期して準備を進めている。

ニ　既に述べたように，「過疎研究」は一応のデータ収集を完了したが，長野県上村（特に下栗地区）については改めて追跡研究を企図し，本年新たに調査を行なった。これまでの結果得られたいくつかの問題点にのみ焦点づけ，その後の意識・態度の変化の経緯を押えようとするものである。目下継続中であり，まだ整理の段階には至っていない。

ホ　以上に述べた継続課題とともに，新たな課題として次のものを考えている。長野県上村と島根県頓原町については，「資料集」による在村者のデータと離村者のデータが対応したものとして整っており，この両者のつき合わせを通して過疎問題のもつ多様な側面を同時に統合した分析が可能になると考えられるので，取組んでみたい。

2. 昨年の本欄で触れた，社会構造の形態を異にする地域における，住民の生活意識の変容に関する調査研究は，その後愛知県下の三町村を対象に実施し，今年度の年報社会心理学第14号に「地域社会構造の変化に伴う住民の生活意識の変容」と題してまとめる機会を得た。今後とも，さし当っては地域社会の変化と住民意識の変容との関連を様々な側面から追究することを通して，地域社会心理学の問題と構想を考えてゆきたい。

3. 時間的展望の研究に関しては「青年の時間的展望と職業に対する態度」として今年度の青少年問題研究第22号にまとめたが，この研究に関しては構想が中断しており，目下のところ新たな展開は意図していない。

4. 愛知県コロニーにおける「在宅心身障害児対策に関する基礎的研究」のプロジェクトへの参加（県嘱託）は，現在のところ諸般の事情から十分計画通りの進展をみていない。

研究経過報告　久　世　敏　雄

1. 社会化に関する研究

(1) 幼児期の社会化に関する従断的研究

この課題について，共通の関心をもつ者が集まり，園児の依存および攻撃行動の観察（初年度）を行なってい